



タルコット・パーソンズ教授

# 名誉学位関係書類

## (1) 名誉学位記

割印	第 5 号
	名 誉 学 位 記
	U.S.A. Talcott Parsons
	貴下は学識顕著にして文化の発展に対する貢献多大なるをもって 関西学院大学名誉博士の学位を贈る
	1978年12月14日
	関 西 学 院 大 学 ⑩

(英 文)

Kwanssei Gakuin University on the recommendation of the University Council and the Board of Trustees has conferred the degree of

Doctor of Laws

upon

Talcott Parsons

in virtue of his contribution to the advancement of culture.

Given on the 14th of

December, 1978.

## (2) 名誉学位審査報告書

昭和53年11月29日
関西学院大学大学院
委員長 小寺武四郎殿
(名誉学位審査委員)
社会学研究科委員長 倉田和四生
社会学研究科委員 萬成博
経済学研究科委員 田中敏弘
名誉学位の審査報告書
本委員会は、ハーバード大学名誉教授 タルコット・パーソンズ氏の名誉学位について慎重に審査いたしました結果、パーソンズ教授のなした研究上の業績および本学に対する貢献からみて、名誉学位の贈呈にきわめてふさわしいものであるとの結論に達しましたので関係書類(履歴書、業績書、功績調書)をそえて報告いたします。
以 上

### (3) タルコット・パーソンズ教授の略歴と業績書

(1902年 12月13日生 満75才)

アメリカ合衆国 マサチューセッツ州 ベルモント

#### (学 歴)

- 1920～1924 アメリカ合衆国 マサチューセッツ州 アーモスト・カレッジ 卒業
- 1924～1925 ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリテクスに留学
- 1925～1926 ハイデルベルク大学に留学
- 1927 ハイデルベルク大学の哲学博士の学位 (社会学・経済学) を得る

#### (職 歴)

- 1926～1927 アーモスト・カレッジ (経済学) のインストラクター
- 1927～1931 ハーバード大学 (経済学) のインストラクター
- 1931～1936 ハーバード大学 (社会学) のインストラクター
- 1936～1939 ハーバード大学 助教授
- 1939～1944 ハーバード大学 準教授
- 1944～1972 ハーバード大学 教授
- 1944～1945 ハーバード大学 社会学科長
- 1946～1956 ハーバード大学 社会関係学科長
- 1953～1954 ケンブリッジ大学 派遣教授
- 1957～1958 スタンフォード大学 行動科学研究センター特別研究員
- 1966～1967 グッゲンハイム助成金特別研究員
- 1972 ハーバード大学名誉教授

#### (学 会 活 動)

- 1942 アメリカ東部社会学会会長
- 1949 アメリカ社会学会会長
- 1960～1965 アメリカ社会学会幹事
- 1967 アメリカン・アカデミー・オブ・アート・アンド・サイエンス会長

#### (賞 罰)

- 1949 アーモスト・カレッジより名誉人文学博士の学位を受く
- 1963 ケルン大学 経済・社会科学部より名誉博士の学位を受く
- 1963 コログニ大学 (ドイツ) より名誉博士の学位を受く
- 1967 シカゴ大学より名誉法学博士の学位を受く
- 1969 ボストン大学より名誉博士の学位を受く
- 1973 ヘブライ大学より名誉博士の学位を受く
- 1974 ペンシルベニア大学より名誉博士の学位を受く
- 1976 ラトガス大学より名誉博士の学位を受く

#### 業 績 書 ———主 な 著 作———

- 1937 社会的行為の構造 フリープレス
- 1947 純粹および応用社会学理論集 フリープレス
- 1951 社会体系論 フリープレス

1951	行為の総合理論をめざして	ハーバード大学プレス
1953	行為理論の作業論文集 (ベールズとの共著)	フリープレス
1955	家族・社会化および相互作用の過程 (R. E. ベールズとの共編)	フリープレス
1956	経済と社会 (N. J. スメルサーとの共著)	ルーツレッジ・ケンガンパール
1960	近代社会の構造と過程	フリープレス
1961	社会の諸理論 (E. シルズらと共編)	フリープレス
1964	社会構造とパーソナリティー	フリープレス
1966	社会類型——進化と比較	ブレンティス・ホール
1966	アメリカの黒人 (K. B. クラークと共編)	フートン・ミフリン
1967	社会学理論と近代社会	ザ・プレス
1968	アメリカ社会学 (編著)	ベーシック・ブック
1969	政治と社会構造	フリープレス
1971	近代社会の体系	ブレンティス・ホール
1972	前近代社会に関する論文集 (V. リッツとの共著)	ブレンティス・ホール
1973	アメリカの大学	ハーバード大学プレス
1977	社会の進化 (社会類型と近代社会の体系の統合版)	ブレンティス・ホール
1977	社会システムと行為理論の進化	フリープレス
1978	行為理論と人間の条件	フリープレス
	その他 論文多数	

## (4) 功 績 調 書

ハーバード大学名誉教授

タルコット・パーソンズ

### (1) 研究活動上の功績

#### 1) 理論上の貢献

タルコット・パーソンズ教授は1927年より1972年まで45年間、ハーバード大学において研究教育にあたり、学界においてきわめて重要な働きをしている世界的に著名な社会学者であります。

教授はアーモスト・カレッジを卒業後、ヨーロッパに学び社会理論を研究しましたが、ことにM. ウェーバー、E. デュルケーム、A. マーシャル、V. パレートの社会理論を総合して「主意主義的行為理論」(1937年)を創造いたしました。また教授はウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を最初に英語に翻訳(1930年)された人としても知られています。このようなヨーロッパ社会理論との深いつながりこそ、教授の理論に深みと広がりを与えているものと思われま。

教授は主意主義的行為理論をもとに、アメリカの文化人類学、心理学、精神分析理論、生物学の理論的成果を吸収しながら「システム概念」によってこれらを総合し、社会、文化、パーソナリティを含む「行為システムの一般理論」(1951年)を構築いたしました。さらにその下位システムとしての「社会システム」(1951年)は四つの機能的サブシステム(経済、政治、統合、社会化)をもち、これら四つのサブシステムの間での相互交換によって社会システムの生活が営まれるものと考えられています。そしてこれらの機能的サブシステムと社会との関連についても研究をすすみ、『経済と社会』(1956年)、『政治と社会構造』(1969年)、『パーソナリティと社会構造』(1964年)などの著書を公刊しています。教授が創造した多数の概念や概念図式のなかでも特に「行為関係枠」、「型の変数」、「四つの機能的問題」、「進化の過程」(適応能力の上昇、分化、包摂、価値の一般化)などは理論社会学上のすぐれた業績として高く評価されてい

ます。

このように、教授の研究成果はきわめて独創的な業績として世界から注目されているところです。

教授はこのような「行為システム」の分析に併せて、1960年代の後半から、社会類型の進化と比較についても研究をすすめて、その成果が『社会類型—進化と比較』(1966年)、『近代社会の体系』(1971年)として出版されています。さらに1977年には『社会システムと行為理論の進化』、1978年には『行為理論と人間の条件』を発表いたしました。これによって教授の学問的体系はようやく完成に向いつつあるものと考えられます。

さらに教授はこれらの理論的研究の外に現実の社会問題、すなわち「人種問題」(『アメリカの黒人』(1966年))や「大学問題」(『アメリカの大学』(1973年))についても研究し、貴重な貢献をされています。

## 2) 学会活動

パーソンズ教授は社会学者ではありますが、その研究範囲は「行為システム」の全域に及んでいるため、文化人類学、心理学、精神分析理論、生物学、政治学、さらに経済学など多数の学会で活動しています。その中で要職についたものだけをあげると、

- ① アメリカ東部社会学会長 (1942年)
- ② アメリカ社会学会長 (1949年)
- ③ アメリカ社会学会幹事
- ④ アメリカン・アカデミー・オブ・アート・アンド・サイエンス会長 (1967年) などがあります。

## 3) 研究者の養成と指導

1920年—1930年代はシカゴ大学の社会学科がアメリカの社会学界を支配したといわれていましたが、1950年代からはハーバード大学がこれにとって代わったと見られています。パーソンズ教授はこの「ハーバード学派」の頂点に立つものでありますから、彼に教えを受けた研究者はすぐれた大学の社会学科で重要な地位を占めています。

例えば、コロンビア大学のR. K. マートン、カルフォルニア大学のR. ベラー、同じくK. デービスなどのほかR. ウィリアムズ、E. C. デベロー、L. ウィルソン、W. ムーア、B. バーバー、A. コーヘン、M. レヴィなどきわめて多数にのぼっています。

これによっても教授の影響力の大きさが推察されます。

## 4) 海外の学界への貢献

パーソンズ教授の学界活動はアメリカ合衆国内にとどまらず、海外の学界にも大きな影響を及ぼしています。パーソンズ理論が与えている衝激は西欧や日本だけでなく、いまや全世界におよんでいるのが実情であります。

教授はアメリカ合衆国のほか英国、ドイツ、イスラエル、オーストラリア、日本など多数の国で講義や研究に従事しており、ケルン大学、コログニ大学、ヘブライ大学から名誉学位を受けています。

### (2) 関西学院大学にたいする貢献

パーソンズ教授は昭和53年10月20日、関西学院の招きによって来学されました。社会学部大学院においては10月23日から12月15日まで、週4講時の割合で「理論社会学特殊講義」(「行為理論」および「現代社会の諸問題」)を担当されていますが、この講義には学内、学外の教授、大学院生が約40名参加されており、10名の大学院生は正式に4単位を与えられることになっています。

また11月17日、18日の両日、関西学院セミナーハウスにおいて開館記念の講演(「現代社会の危機について」, 「現代社会と宗教」)をおこないました。このセミナーには遠く東北、関東、北陸を含め全国各地から教授の名声をしたって約100名の研究者が参加いたしました。

その他にも教授は10月25日、社会学部主催の学術講演会において「現代社会学の展開—反省と展望」という題で講演されましたが、満員の聴衆が教授の講演に聞入りました。さらに11月24日には大学主催学術

講演会において「現代社会と大学の諸問題」と題する講演をしていただき、多くの聴衆に深い感銘を与えました。

さらに教授は関西学院滞在中に、「日本社会学会」、「組織学会」、筑波大学および余暇開発センター共催の「余暇問題に関する国際会議」においても講演されました。

したがって関西学院がパーソンズ教授をお招きして講義や講演をしていただいたことは、ひとり関西学院の学問的水準の向上に資しただけでなく、広く日本の学界にもきわめて大きな貢献をなしたものであると思われます。

昭和53年11月29日

以上

## パーソンズ記念号によせて

社会学部長

倉田和四生

昭和53年10月中旬から12月中旬にかけて関西学院に滞在され、社会学部の大学院において集中講義をしていただいたタルコット・パーソンズ先生を記念して特別号を公刊する運びとなりましたことを皆様とともにお慶び申し上げます。

そこで先生をお呼びすることになったいきさつや、先生の関西学院における足跡などについて記してみたいと思います。

昭和52年3月、関西学院大学に客員教授の制度が設けられたころ、私はこの制度によつてタルコット・パーソンズ先生を社会学部に御招待することが出来ないだろうかという途方もない願望を抱くようになった。しばらく躊躇しているうちに数ヶ月が流れましたが、秋に入ったころ、20余年来、抱いて来た夢が万が一にも実現することがあればと願って、パーソンズ先生の論文（An Outline of the Social System）の翻訳の承認を得たいという私の個人的な願いと併せて、社会学部の客員教授として招待したい旨を書送りました。ところが、全く幸いなことに、パーソンズ先生は私の申出を真剣に考慮したいという返事をすぐ書送って下さいました。そして結局、他の機会を捨てて関西学院へおいでいただいたわけであります。最初は社会学部の客員教授として迎える予定でありましたが、新しく開館される関西学院セミナー・ハウスの講師として招待し、併せて社会学部の大学院で講義していただくことになりました。

パーソンズ先生は10月20日に関西学院に来られ、12月17日に帰国されましたが、その間、関西学院キャンパス内の外人住宅2号館で生活されました。丁度、季節的にもいい時期でしたので御夫妻とも健康で快適に過ぎたようです。

先生は11月17日、18日の両日、関西学院セミナー・ハウス開館記念セミナーにおいて二つの講演をおこないました。まず「現代社会の危機について」では「危機」を独自の仕方ととらえたあと、現代の社会変動をおしすすめるものとして「教育革命」の重要性を強調されました。また「現代社会と宗教」ではアメリカを中心に宗教的状况を歴史的にあとづけ、そこに多面的な様相がみられることや最近のエキユメニカルな動向の重要性を指摘され、さらに「パネル・ディスカッション」および「質疑応答」においても先生の持論を展開されました。これらの講演を通してパーソンズ先生が現代社会にたいして、いかに強い関心と透徹した分析理論をもっておられるかということを知ることが出来ました。

次に大学主催の学術講演会（11月24日）においては「現代社会と大学の諸問題」について講演されました。その中で、高等教育は社会構造にたいしてたえず変革的影響を加えている重要な制度であること。脱工業社会を特徴づけるものは産業ではなくむしろ大学制度であること。さらに大学のなかに、一般教育、大学院、専門職業、研究機能など「多機能の一般的大学」（例へばハーバード大学）が形成されて来たこと等を指摘されました。

社会学部では10月25日の社会学部主催の学術講演会において「現代社会学の展開——反省と展望」という題で話されましたが、その中で現代社会学理論の基礎はマックス・ウェーバーとエミール・デュルケムによつて基礎づけられた路線にそつて展開しており、極端な理論

を唱える人達もこの路線の主観的な面か、客観的な面のいずれかを一方的に強調しているにすぎないと述べられました。そしてそこにはパーソンズ先生自身、ウェーバーとデュルケームの真の綜合者であるという強い自負がにじみ出たものでありました。

社会学部大学院の集中講義は10月23日から12月15日までおこなわれました。前半は「行為理論の一般図式」のハイライトについて論じられましたが、すでに公刊された理論だけでなく未発表の理論にもつぎつぎと言及され、実に興味深いものがありました。後半は現代社会の諸問題のなかからいくつかのテーマを選んで述べられましたが、現代社会が価値多元的な社会であり、それが次第に複数社会の世界的システム (World System of Societies) に向って進んでいくというパーソンズ先生の確信がくり返し説かれました。ここでもわれわれは改めて、先生が現実の社会に極めて強い関心を持ち、すぐれた分析理論をもっておられることを知ることが出来ました。

この集中講義には学部内外の教授や大学院生が40名近くも参加し、先生の熱の入った講義に聞入り、またオフィス・アワーでは多くの質問者が先生と討論を重ねました。このような機会をもったことによって学部の教授陣や大学院生だけでなく、学部生にいたるまで、パーソンズ理論にたいする関心が高まり、ひいては社会学理論全般にたいする研究熱が、より一層、強まるものと確信いたします。

パーソンズ先生は関西学院滞在中に「日本社会学会」、「組織学会」、筑波大学および余暇開発センター共催の「筑波会議」においても講演され、また岩波書店の雑誌『思想』(54年3月号)において富永健一教授と対談もなさいました。

したがって関西学院がパーソンズ先生をお招きしたことは、ひとり関西学院の学問的水準の向上に資しただけでなく、広く日本の学界にもきわめて大きな貢献をなしたものと思われま

す。パーソンズ先生の学問上および関西学院への貢献を高く評価した関西学院大学は、12月14日、先生にたいして「関西学院大学名誉学位」を贈呈いたしました。先生はすでに世界各国から八つの名誉学位をもらっていますが、日本からは初めてのものだと言われ喜んでおられました。

このような有意義な学問的催しがもたれた機会に社会学部紀要第38号をパーソンズ記念号とし、この中にパーソンズ先生の「関西学院大学名誉学位記」と三つの講演を掲載することにいたしました。

関西学院大学から名誉学位を贈られた12月14日が奇しくも、先生の満76才の誕生日に当たっていました。これからも健康に留意され、壮大なパーソンズ理論の完成にむかって前進されることを祈ってやみません。